

書籍紹介

- 小曾戸洋 ほか 編『日本医家伝記事典——宇津木昆台『日本医譜』——』
..... 松村 紀明 351
- 安田登・久保寺司・水谷惟紗久 著『歯科医療のシステムと経済
——18世紀から21世紀まで——』 永島 剛 351
- 投稿規定 353
- 編集後記 355

《本号の表紙絵》

「アームチェアに座る男の頭を殴るインフルエンザ・ウイルスのモンスター」(1918年)

(A monster representing an influenza virus hitting a man over the head as he sits in his armchair.

Pen and ink drawing by E. Noble, c. 1918. Credit: Wellcome Collection.)

第一次世界大戦さなかの1918年春頃からパンデミック化した新型インフルエンザ。1920年頃までに全世界で数千万人が死亡したといわれる。

1892年にドイツの細菌/免疫学者ファイファー (R. F. J. Pfeiffer) が、「インフルエンザ菌」と名付けられた細菌の存在を報告していたが、1918年当時のイギリスの保健当局者のレポートを読むと、その細菌とは別の、未知の病原体が流行を引き起こしているのではないかという認識が、このパンデミック初期に広まりつつあったことがわかる。インフルエンザ・ウイルスの存在が判明したのは1930年代のことだが、このときすでに病毒という意味で「ウイルス (virus)」という語は一般的に使われていたようである。(参考文献: Arthur Newsholme, “Discussion on Influenza”, *Proceedings of the Royal Society of Medicine*, 1919, 12, pp. 1-18.)

表紙絵として掲載した戯画は、イギリスの漫画家 (cartoonist) アーネスト・ノーブルによるもの。「こんばんは、私が新たなインフルエンザだ！」というセリフが付されている。画自体はユーモラスだが、検査手段もなく、突然に個人を襲う、得体の知れない病原体の怖さが表現されているとみることができるかもしれない。

(永島 剛)